叢書・ことばの世界

日本語と性

渡辺友左 著

南雲堂

著者略歴

渡辺友左（わたなべともすけ） 1929年生れ。東北大学文学部社会学科卒業。言語社会学専攻。現在，国立国語研究所言語行動研究部長。〔主要著書〕『各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)』，『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)(2)(3)』，「階層と言語」（『岩波講座日本語』第二巻所収），『隠語の世界——集団語へのいざない』

叢書・ことばの世界

日本語と性

一九八二年十一月十五日　一刷発行

定価一五〇〇円

著者　渡辺友左

発行者　南雲克雄

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

発行所　株式会社　南雲堂

東京都新宿区山吹町二〇一　〒一六二

電話東京（二六八）二三一一（代）

振替口座　東京六—四六八六三番

製本　若林製本所

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通販係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

検印廃止

© 1982 Tomosuke Watanabe

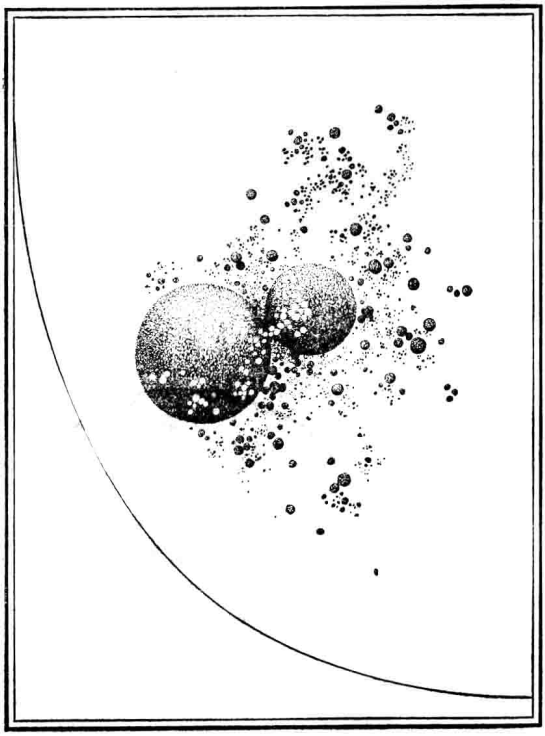
Printed in Japan 〈1—84〉

1081-320084-5625

書・ことばの世界

日本語と性

渡辺友左 著



南雲堂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装丁　斎藤和雄
挿絵　中島弘二

はしがき

〈性〉の話は、どうしてもえげつなくなる。聞く人、読む人に不潔感を抱かせずに〈性〉を語るのは難しい。さらりと、しかし面白くと思って執筆した本書も、折角の著者の意図とは反対に、えげつない内容に堕してしまったかとおそれる。

わたしは、社会学の立場から、日本各地の方言の親族語と、その親族語が指し示す各地の親族や家族の調査研究をここ何年か続けてきた。

親族や家族の組織の中核には〈夫婦〉がある。まず夫婦関係があって、次にそこから親子関係や兄弟姉妹関係ができ、それらが拡大・連鎖されて、祖父母—孫、おじ・おば—おい・めい、いとこ・またいとこ……などの家族や親族がつくられていく。このようにみると、夫婦は、家族や親族の出発点にあるということになる。

この夫婦には、いうまでもなく〈結婚〉の問題がある。結婚には〈性交〉の問題がある。そして性交には〈生殖〉や〈快楽〉の問題、近親相姦タブーの問題がある。……

こんなことから、落語家小さん師匠が得意とする古典落語の出し物『浮世根問』の八つァんではないが、わたしは日本人の〈性〉とそれにかかわる〈日本語〉の問題にも研究者としての

知的興味と関心をもつようになった。その一部を一般の読者のために書きつづったのが本書である。文章は、できるだけわかりやすく読みやすいようにとつとめた。

週刊誌、新聞、単行本など、それに映画、ビデオやビニール本など、現代は〈性〉に関する低俗で興味本位の、そして刺激的な情報が氾濫している。情報化社会とかポルノ・エイジとかよばれるゆえんである。そうした興味本位の観点からではなく、より知的な観点から〈性とことば〉の問題を見つめてみたいという読者に対して、本書がなにがしかでもお役に立つところがあれば、著者としてたいへん幸せである。

刊行にあたっては、前著『隠語の世界――集団語へのいざない』と同じく、南雲堂編集部の佐伯久さんにたいへんお世話になった。心からお礼を申し上げます。

昭和五十七年九月十五日

渡辺友左

日本語と性・目次

はしがき　3

現代社会と性用語

1　現代若者の性行動の一断面　11

2　性の二つの顔——生殖と快楽　15

3　オナニーと亡霊婚のこと　23

4　《交尾》を知らない女子中学生　32

5　《結婚》とは何か　40

性交をめぐる社会的規制

1　近親相姦と近親婚の禁止　55

『旧約聖書』のインセスト・タブー（五六）　『コーラン』のインセスト・タブー（五八）　法律のインセスト・タブー（六〇）　わが国における近親相姦（六三）　インセスト・タブーはなぜ存在するか（六八）

2　婚外性交の規制　69

純潔・童貞・処女など（六九）　美人局・間男・姦通など（七九）

〈とつぐ〉の意味――今と昔
1　ナツメロ〈誰か故郷を想わざる〉　93
2　奈良・平安時代の〈とつぐ〉　96
『延喜式』の祝詞の場合（九六）　『今昔物語集』の説話の場合（一〇〇）　『日本書紀』の国産み神話の場合（一〇二）
〈とつぐ〉の語源（一〇七）

胞衣（えな）とアライゴ――俗信と俚言
1　胞衣と〈アライゴ〉のかかわり　115
2　古典落語『氏子中』のこと――傍証㈠　119
3　古川柳「もめる筈胞衣ハ狩場のゑづのよふ」のこと――傍証㈡　127
4　『日本産育習俗資料集成』のこと――傍証㈢　130
5　〈アライゴ〉胞衣俗信説――まとめ　136
6　性交・妊娠をめぐる俗信のこと――付記　141

私生児の意味と方言
1　〈私生児〉とは何か　153

2 私生児を意味する方言 160
ヨバイゴ（一六一）　ナジミゴ（一六八）　ヘラゴ（一六八）
ドラゴ・ドラッコ（一六九）　ツキヨゴ（一六九）　ヤダレゴ（一七〇）　モダリゴ（一七一）

索引 180

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代社会と性用語

1　現代若者の性行動の一断面

今朝の新聞に次のような記事がのっていた。わたしは昭和初期の生まれ。戦中、そして戦後の混乱期に青春時代を過ごした。すでに五十路を越した昔若者である。記事を読んで、思わず「うーむ。」とうなった。そしてつぶやいた。「今の若者たちはねェ……。すすんでるねェ……。超えてるねェ……。」読者の皆さんは、それぞれ自分の体験に照らして、どうお感じになるだろうか。

若者の性、女性の方が〝活発〟

青少年の性的体験が全体に増加しており、特に少女たちの活発な行動が目立つことが明らかになったと、総理府は五日、青少年の性行動調査結果を発表した。

この調査は総理府が財団法人日本性教育協会（剣木亨弘理事長）に委託したもので、一九七四年に続き二回目にあたる。全国七都市の十五歳から二十三歳までの男女計四千九百九十人に各種の経験年齢をアンケート方式で回答してもらった。

その結果、性行動の面では、男女とも経験率が増加し、性交経験が、男子は二十一歳で

四六・八％と前回の二八・一％から一・七倍ふえた。また、女子は二十一歳で三六・五％と、前回の一五・九％から二・三倍ふえている。

このほか男女ともキス経験が十九歳で五〇％に近づき、ペッティング経験は二十一歳で五〇％を超えている。

異性と一対一でつき合うデートは十六歳以上で、女子が男子を上回る経験をしており、キスも二十―二十一歳では女子の方が上回っている。

性交経験の伸び率なども総合すると、最近は女子の性行動が男子に比べて活発になっているようだと同協会ではみている。

一方、からだの成熟については、男子では精通経験が十三歳で六〇・三％、女子では初潮が十二歳で五八・八％となっており、前回調査の男子五三・八％、女子五四・二％などと比べて大差がなかった。六〇年代には、性的な成熟が低年齢化していることが問題になったが、最近、この傾向がとまったことを示している。（略）

（一九八一年一一月六日付『朝日新聞』朝刊社会面）

右の記事で、《精通》とは、男子が性的に成熟して、《射精》するようになること、つまり男性器から精液を体外に発射するようになることをいう。男子が生殖の上で、男としての能力

が備わったことを意味する。

この語は、「Aさんは、東京の地理に精通している。」などという場合の《精通》と語形は同じだが、意味がまるきり違う。こちらの《精通》は、物事の細かなところまでくわしく知っているという意味。全くの別語である。

このくわしく知っているほうの《精通》は、どの国語辞典も見出し語として採録している。しかし、射精するようになるほうの《精通》を見出し語に採録している国語辞典はほとんどない。『広辞苑』はもちろんのこと、『日本国語大辞典』のような大きな国語辞典も見出し語にしていない。手元にある国語辞典で採録してあったのは、『三省堂国語辞典』だけであった。この語は、今日では高等学校の保健体育の教科書でも使われている。また、女性の《初潮》は、どの国語辞典も見出し語に採録している。男性の《精通》を採録しないのは、片手落ちというものだろう。

高校保健体育のある教科書では、次のように使われている。

性機能

性腺刺激ホルモンによって性腺が発達すると、性腺は性機能を発揮するようになる。すなわち、男子はこう丸の精細管で精子をつくるようになり、これがこう丸・副こう丸・精

のうなどにたくわえられる。精子が精のうや前立腺の分泌液とともに精液を形成して、体外に射出されることを射精といい、一四～一五歳ごろより射精現象がみられるようになる（精通現象）。こう丸の間質細胞からは男性ホルモンが分泌される。男性ホルモンは、第二次性徴の発達を促すばかりでなく、性器とくに陰茎・精のう・前立腺などの発達を促す。

（加藤橋夫他著『標準高校保健体育』一〇一―一〇二ページ、講談社）

わたしが中学生だった頃（昭和一七―二一年）には、このような性教育を学校の教科として教わることは全くなかった。当時そのようなことをわたしたちが教わるとすれば、多くは上級生からであった。学のある上級生が蘊蓄を傾けて教えてくれたものである。思えば、世の中は変わったものだ。（とは言っても、これほど科学的なことは教わった記憶がない。）

冒頭の新聞記事にもどろう。《初潮》とは、いうまでもなく女子が性的に成熟して、初めて月経があること。《初経》ともいう。月経は、《メンス》《生理》などともいう。古くは《障り》《月役》《月のもの》などともいった。いずれも月経を不浄なものとして避け、これを婉曲に表現しようとしたものである。婦人の乳房をストレートに《乳房》《乳》《おっぱい》などといわず、婉曲に《胸》といったりするのと似た心理である。

《メンス》は、月経を意味するドイツ語のメンストルアチオーン（Menstruation）、または英

語のメンストルエイション（menstruation）の下略形である。

精液のことは《ザーメン》ともいう。種・子孫・精子・精虫・精液などを意味するドイツ語のザーメン（Samen）の借用である。若者のスラングでは、《ヨーグルト》《ミルク》などともいうらしい。造語の心理はよくわかる。

2　性の二つの顔——生殖と快楽

さて若者を含めて大人からみると、わたしたち人間の性には、大きくいって二つの顔がある。一つは《生殖》という顔であり、二つは《快楽》という顔である。普通の大人なら、とりわけ既婚の大人なら、すでに自分の体験的事実としてどちらの顔も知っているはずだ。

生殖というのは、要するに子どもをつくることである。子どもをつくるには、当然のこととして男女（一般には夫婦）が性の交わり、つまり《性交》をしなければならない。性交をしないで子どもをつくることができたのは、聖母マリア様ぐらいのものであろう。

性交をしても、子どもができない。そのとき日本人はどうしたか。昔はまず神や仏に祈願した。《子宝》をお授け下さいと祈ったのである。

神仏に祈願し、そして神仏から授かった子どもを《申し子》という。「この子は神田明神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com